

## 十 蚊帳一つにても

「貧乏はしても正月は来る。新しい年は迎へねばならず」と云つた處で錢はなし、子餓鬼は餅を欲しがるし、仕方がないから、差當り不要な蚊帳を質に入れる、入れたものゝ、恁ふ蚊が食ふ時節となつては困つたものぢやのう」と親爺は破團扇を片手に歎息する。側から女房が、「あの時はまア今は要らぬからと思ひましたが、恁ふ蚊が出て来ては全く叶ひません」と云つて代りにやる布團はなし、何ぞ出す工夫はございますまいか。「左様ぢやのう、二人だけなら單衣を被つてゝも堪へるが、子供はそれでは聞かないし。何ぞ出す工夫と云つたとて……。オウ出たく」。出たつて何がいのう、蚊が出るばかり、まさかお金が出はすまい。「お金ぢやない歌がよ」。歌が出たつて歌で蚊帳が出されはすまい。「まアよう聞け恁んな歌が出た」。

忘れても置くまいものは蚊帳の質、外で利がくう内で蚊がくう

ほんにつまらぬではないか。間違へてゝも忘れてゝも、蚊帳の質だけは置くものでないぞと云つたさうな。

お寺参りは年寄の氣慰み仕事、佛法聽聞は若い者のする仕事でないなど、向ふの方へつきやつて我儘ばかり定めて置くと、目前の時には、利にくはれ蚊にくはれる段の事ではない。此世では淺間しい日暮をいたし、未來は永く火柱抱いて泣き明かさにやならぬ。

忘れても聞くべきものは法の道、外で褒められ内で安心

或木賃宿に泊つたお客。朝になつて主婦さんに怒鳴りかゝる。「昨夜の蚊帳は破れて居たに相違ない。一晚中蚊に食はれて困つた。あんな破れ蚊帳を釣つて、木賃は拂はぬぞ……」。「何を仰しやる、破れては居らぬ筈。何處に寢まれました」。「つひその入口へ」。「ハアそれでは彼處に暖簾があつたから

それを潜つたのでせう」。云はれて見れば「成程自分が粗忽であつた。一杯聞召してゐた拍子に」位で濟んで了つた。さて其晩客はまた酒に酔うて、寢間へ轉げ込んだ。今度は主婦さん氣をきかして、暖簾を巻上げて置いた。それとも知らぬお客。昨夜のに懲々と見え「これは暖簾とさ、今度は蚊帳とさ」。アラまた蚊帳の外に出た。氣の毒なのはお客、昨夜は蚊帳の手前で、今夜は蚊帳の向ふで、二晩とも蚊に食はれて了つた。

佛法を以て世渡りの道具と心得、現世祈りの種にする人や、一時の氣慰み半分に聽聞するやうな人やは、蚊帳の手前に寢て居るもの。佛法を鼻にかけ極樂を我物顔にし、御慈悲を未來の方へ突き遣つてゐるのは、矢張本願の蚊帳の向ふへ抜けて居るのぢや。共に佛法の眞意が解らぬ、這入つた積りで這入つて居らぬ。此世さへ甘く切抜けければ未來は云何でもと云ふのも、此世は假の宿未來さへ助かればと云ふのも、共に蚊帳の外で蚊に食はれるのぢや。人生問題に目が覺めて、他力本願の蚊帳に入らねばならぬと氣付いたら、投出の信仰や手造りの安心でなく、乗彼願力と其中へ轉込むがよい。

而してその蚊帳に這入るには、頭を屈め頭を下げてゝなければならぬ。大名ぢやとて、侍ぢやとて、高等官ぢやとて、立ちはだかつて、大手振つて這入る譯にはゆかぬ。這入つたらそれこそ大變。「大名もかぐんで這入る蚊帳の中」。俺は大名ぢやぞとて、自ら力んでも仕方がない。如來本願の蚊帳に這入るにも、矢張り「我身は悪き徒者」地獄一定と、我れ物知顔も、我れ心得顔も、我身あり顔も打ち捨てゝ、斯る機までも御助けと、打ちもたれつゝ本願の他力の中に轉げ込むのである。加賀の千代は詠んだ。「煩惱の蚊は追へども去らず、菩提の螢は招けども來らず、さらば計らひの團扇を捨てゝ」と前書して「丸はだか他力尊や蚊帳の中」。こんな涼しい事、こんな有難い事はな

い。こゝが私共の信仰生活である。此一生を如來の御慈悲の蚊帳に包まれて、嫌な蚊の聲も音楽と聞きなすゝ暗の夜を明かし、夜が明けると御日様拜む如く、娑婆の終り臨終の時、生死世界の夜が明けて、瑠璃の大地に大悲の親様を拜むのである。

他力の啓示は到る處にあり。蚊帳一つでも悟を得る御縁となる。

~~~~~

折れな折れじと親竹子竹、すがり合ふたる雪の朝

辛抱しやんせきりくしやんと、掛けた襷の切れる程

迷ふ紫陽花七色かはる、色が定まりや花が散る